学生の地域連携プロジェクトと効果
―「倉敷素隠居プロジェクト」の事例から ―

柳田　宏治・五十嵐英之・井上　昌崇・クリス･ウォルトン
近藤　千晶・森山　知己
倉敷芸術科学大学芸術学部

（2018 年 10 月 1 日　受理）

はじめに

2007 年に改正された学校教育法（第 83 条）で、研究、教育に加えて地域貢献が大学の 3 つ目の使命に加えられたこともあり、大学と地域との連携事業が盛んになってきている。筆者らの勤務する倉敷芸術科学大学でも、文部科学省による平成 26 年度「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC（Center of Community）事業）[註1] にくらしき作陽大学と共同申請した「文化産業都市倉敷の未来を拓く若衆育成と大学連携モデル創出事業」[註2] が採択され、現在、さまざまな事業が推進されている。

本稿では、倉敷芸術科学大学における大学 COC 事業の 1 つである、「地域課題解決に取り組むことのできる地域人材を育成する教育プログラム開発事業」[註3] に位置付けられている芸術学部デザイン芸術学科の授業「総合プロジェクト実習Ⅰ」で、筆者らが行った地域連携プロジェクト「倉敷素隠居（すいんきょ）プロジェクト」の概要を述べ、さらにプロジェクトの評価について参加学生に対するプロジェクトの効果の評価を含めて報告する。

1．「倉敷素隠居プロジェクト」の概要

倉敷芸術科学大学は岡山県倉敷市の南部に位置し芸術学部、生命科学部、危機管理学部の 3 学部と大学院で構成される学生数約 1,300 人の小規模校である。同校が所在する倉敷市は、近代美術を展示する日本最初の美術館である大原美術館を有し、また工芸や民芸の盛んな地域であることから、同校に対して 1995 年の開学時から芸術分野の研究や教育、そして地域への貢献が期待されていた。

2014 年度に採択された大学 COC 事業の 1 つに、「地域課題解決に取り組むことのできる地域人材を育成する教育プログラム開発事業」がある。これは、1 年次から 4 年次まで設けられた特定の科目を履修することで、地域に貢献できる人材を育成するもので、芸術学部デザイン芸術学科では、3 年次前期科目の「総合プロジェクト実習Ⅰ」および 3 年次後期科目の「総合プロジェクト実習Ⅱ」がこれに位置付けられている。

「倉敷素隠居プロジェクト」は、2016 年度および 2017 年度の「総合プロジェクト実習Ⅰ」で、

芸術を学ぶ学生の専門性を活かせる地域貢献テーマとして実施された。

尚、3年次の「総合プロジェクト実習Ⅰ」は、2年次の「総合プロジェクト演習Ⅰ」および4年次の「総合プロジェクト実習Ⅲ」と同一同時限に3科目3学年合同で行われるものである。この中で、「倉敷素隠居プロジェクト」を含む複数のプロジェクトが並行して実施され、学生はそれらの中から1つを選択して取り組む。「倉敷素隠居プロジェクト」を選択したのは該当科目履修者の一部の学生で、2-4年次生が合同で取り組んだ。

また、「倉敷素隠居プロジェクト」は、倉敷市が市制50周年記念事業として進める「倉敷未来プロジェクト」[註4)]の1つにも位置付けられた。これは倉敷市が、「市内商工会議所や大学等と協力し、地域活性化の活動や地域の魅力に触れる機会を作ることで、若者の倉敷への郷土愛を高め、倉敷を誇りに思うひとを育てる取り組み」である。

1-1．背景と目的

「素隠居」とは、倉敷素隠居保存会発行の小冊子「すいんきょ」[1)]によれば、「『素隠居』とは、倉敷の祭に現れる「じじ」と「ばば」のお面をかぶった者達のことである。この素隠居は、江戸時代に倉敷美観地区の鶴形山にある阿智神社の前身の妙見宮の祭で、戎町の沢屋善兵衛が獅子舞の宰領に決まったが、寄る年波には勝てず、人形師の柳平楽に自分達夫婦のお面を作らせ、夫婦の代理として店の若衆にこれを被らせ、御神幸の行列に参加させたことが始まりと言われている」とあり、300年以上の歴史がある。

現在では、倉敷素隠居保存会が中心となって伝統を維持しており、倉敷市の観光の中心である倉敷美観地区の北にある阿智神社の春・秋の例大祭では、面を被った素隠居が美観地区内に登場し、市民や観光客に親しまれている。素隠居に団扇で頭をはたいてもらうと一年無病息災で過ごせるといわれており、素隠居が市民や観光客の頭をはたいて回る姿は祭りの風物詩の1つになっている。

この歴史のある倉敷の素隠居をテーマにした地域連携を学生たちが倉敷の歴史や文化を学ぶ機

写真1：例大祭に登場する伝統的な素隠居

会とし、さらに学生による提案が現在の観光資源として活かされることで地域活性化に繋ぐことを目標に「倉敷素隠居プロジェクト」が設けられた。

同時に、大学 COC 事業や倉敷未来プロジェクトの目標の１つとして、学生が地域連携活動に参加することによって地域への愛着が高まり、地域活動により積極的に関わるようになることも求められた。さらにこれが定住の促進に寄与することも期待された。

１-２．体制とメンバー

倉敷素隠居プロジェクトは、倉敷芸術科学大学芸術学部と、倉敷市が行う倉敷未来プロジェクトとが連携し、倉敷素隠居保存会の協力を得る体制で実施された。指導教員として、2016 年度には柳田（プロダクトデザイン）、五十嵐（油画）、井上（陶芸）、ウォルトン（イラストレーション）、近藤（油画）が担当し、2017 年度にはこれに森山（日本画）が加わった。カッコ内は教員の専門分野で、それぞれの専門分野を活かして分担して指導に当たった。

プロジェクト参加学生は、2016 年度は 16 名、2017 年度は 13 名で、基本的に 4 名から成るグループを構成した。特筆することとして留学生の参加があり、2016 年度は 1 名、2017 年度は 5 名が中国および韓国からの留学生であった。

１-３．テーマ

プロジェクトのテーマは、「新たな素隠居面をデザイン制作・提案すること」である。具体的には、学生が倉敷の歴史・文化と素隠居について調査し、今の倉敷にとっての素隠居を再定義したコンセプトから新たな素隠居のオリジナル面をデザイン制作・提案することである。最終成果物として 1 グループ当たり 2 ペアの爺婆の面を作成し、阿智神社の秋季例大祭で自作の面を付けて参加することが求められた。

１-４．プロセスとスケジュール

プロジェクトは 2016 年度、2017 年度ともに 10 週間で行われた。授業は毎週金曜日 3-4 時限の 2 コマ連続の時間割で取り組まれ、そのプロセスとスケジュールは両年度ともほぼ共通であった。2017 年度のものを基に以下に示す。

【第 1 週】：オリエンテーション、講演「仮面について」

学生がより深く広くコンセプトを思索することを助ける資料として、彫刻家であるデザイン芸術学科の濱坂渉教授から、世界中の仮面の事例等を通じて「面／仮面」に関する講義を受けた。

【第 2 週】：素隠居に関する講義と実演

倉敷素隠居保存会顧問の大賀弘章氏を迎え、素隠居の歴史や意義、保存会としての学生のプロジェクトへの期待を伺った。さらに、実物の素隠居面の紹介と実演も

行われた。

【第３週】：調査、コンセプト策定、アイデア発想

仮面の意味や素隠居の情報に加えて、倉敷の歴史や文化、観光の状況等の調査から、新たな素隠居のコンセプトを策定し、アイデアを発想・検討した。歴史的な素隠居の面には様式があるため、これを極端に外すことなく新しさや独創性を生み出すことは大きなチャレンジであった。

【第４週】：中間検討会

倉敷未来プロジェクト実行委員会事務局の安藤俊晴氏を迎えて、新たな素隠居面のコンセプトとアイデアをグループごとに発表し、検討を行った。

【第５週】：スケールモデル、実寸モデル制作

アイデアスケッチに基づき、1/4 スケールのモデルを油土で制作し、造形の検討を行った。スケールモデルで造形の細部を確認した後、１グループ当たり爺婆１ペアの実寸モデルを、押出し発泡ポリスチレンを心材にして油土を用いて制作した。

【第６週】：石膏で型取り

油土による実寸モデルを雄型にして石膏で型取りをし、雌型を作成した。

【第７週】：和紙で張り子型取り

石膏による雌型に張り子の技法で和紙を糊で貼り重ねて型取りした。１つの型で２つの張り子の面を取り、１グループ当たり２ペアの爺婆の面を作成した。

【第８週】：ペイント

アクリル絵の具等を用いて着彩することで肌や目を描き、特徴を出していった。

【第９週】：造作物制作

耳、髪、眉、髭等の造作物を施した。伝統的な素隠居の特徴である、耳は顔とは別パーツで作成されている、爺は髭と眉があるが婆にはない、爺は前頭が剥げている等を基本としたが、学生による独自のコンセプトやアイデアで、異なる考え方の造作物も良しとした。また、人の顔への面の取り付け方法として、近年の素隠居は、面に取り付けた髪が後頭部に回り込んで結ばれ帽子を被るような形になっているが、これについても異なる形式でも良しとした。他の造作物として、団扇、衣装、履物、その他の小道具等をデザイン・制作した意欲的なグループもあった。

【第10週】：プレゼンテーション

プレゼンテーションは、前述の大賀氏と安藤氏を迎えて大学内の教室で行われた。各グループから提案されたのは、基本的にパワーポイントによるコンセプトやアイデアの説明と、爺婆１ペアの型を使用してペイントや造作物を異なるものにした２ペアの爺婆面であった。

【秋季例大祭】：祭りへの参加

授業課題としての取り組みは、両年度とも前期授業で終了したが、毎年 10 月に行われる阿智神社秋季例大祭に、学生は自作の面を被って参加した。

上段左から第 2 週、第 3 週、第 5 週、第 6 週。

下段左から第 7 週、第 8 週、第 10 週。

写真 2：各プロセスでの様子

1-5．成果

成果物としては、新たな素隠居の面が 2016 年度は 8 ペア、2017 年度は 6 ペアが制作・提案された。表 1 は、各グループが提案した素隠居面の写真とコンセプトである。

また、阿智神社秋季例大祭に、学生がプロジェクトの成果物の面を被って「学生素隠居」として参加したことは大きな影響がある成果であった。「学生素隠居」と称したのは、伝統的な素隠居と分けるためである。祭り当日は、伝統的な素隠居が街中各所に出現する中、「学生素隠居」は、まとまって街中を練り歩く形を取り、学生の提案による新たな素隠居（面）を市民や観光客に披露した。

2016 年度		2017 年度	
	おしどり老夫婦		阿智神社の「藤爺・藤婆」 （観光資源「藤の花」プロモーション）
	爺婆の若い頃と今		倉敷の「殿様・奥方様」 （圧倒的 SNS 映え）
	阿智神社の狛犬		中国の「寿老人」をモチーフに （長寿の神様）
	「怖い」素隠居		「大笑い」 （人は笑顔に寄ってくる）

図 1：成果物

写真３：阿智神社秋季例大祭の様子

2016 年度		2017 年度	
2016年10月13日	産経新聞	2017年 7月31日	倉敷ケーブルテレビ
2016年10月15日	山陽新聞 倉敷ケーブルテレビ エフエム倉敷	2017年10月14日	倉敷ケーブルテレビ エフエム倉敷
		2017年11月 1日	倉敷市「広報くらしき」
		2018年 2月 8日	倉敷ケーブルテレビ 山陽新聞

表１：メディアへの掲載

祭り当日およびその他メディアへの掲載等は表２の通りで、伝統的な素隠居にとって新たな取り組みを訴求するとともに、大学の地域連携活動のアピールにも繋がった。

２．プロジェクトの評価

２-１．関係者からの評価

プロジェクトの関係者からは、次のような評価のコメントが得られた。

１）素隠居保存会顧問：

若い学生が大学の地元倉敷の歴史文化に関心を持ち、さらに街に出てきて活動してくれたことは非常に嬉しい。素隠居が 300 年以上の歴史の中で変化してきている中で、今回の「学生素隠居」には新たな切り口の提案もあり大きな刺激になった。

２）倉敷未来プロジェクト実行委員会事務局（倉敷市役所市長公室くらしき情報発信課）：

地域連携の取り組みとして、素隠居プロジェクト自体も有益であったが、このプロジェクトへの参加を通して学生が地域の魅力を再発見し、さらに他のテーマへの参加に繋がることが望まれる。このような持続的な取り組みが、学生に対して大学の地元である倉敷市への地域愛を醸成し、卒業後の就職地として倉敷地域を選び定着に繋がることも期待したい。

３）倉敷芸術科学大学 COC 事業教育部門長：

本プロジェクトは、大学 COC 事業の趣旨に合致した模範的なケースとして位置付けられる。学生たちがまちに出て、まちの活性化に取り組む中で、歴史や伝統を学び地元の宝物を発見し、

さらにそれを若い感覚で新たなものとして作り出したことは素晴らしい。また、この活動が地域愛を育む仕掛けとして機能したことも価値がある。

4）倉敷素隠居プロジェクト参加学生：

プロジェクトに参加した学生は留学生を含む倉敷市外出身の学生が殆どであったので、倉敷のことを知る良い機会になった。倉敷素隠居保存会をはじめ普段は出会うことのない方々との交流を通して地域の課題発見・解決提案の学習ができたことは、実践的な学習として有意義だった。留学生にとっては、日本の祭りに参加し深く関われたことは貴重な経験であった。

2-2．NPS による評価

学生に対するプロジェクトの効果として、マーケティングで使われる手法である NPS（Net Promoter Score）[2] を用いて、プロジェクトの前後で学生が地域（倉敷市）に対する印象がどのように変化するのかを計測した。NPS は 2003 年後半、「ハーバード・ビジネス・レビュー」誌の「The One Number You Need Grow」という記事で紹介された。たった 1 つの「究極の質問」として、次のような質問を投げかけ顧客を分類する。「0 ～ 10 点で表すとして、この企業（あるいは、この製品、サービス、ブランド）を友人や同僚に勧める可能性はどのくらいありますか」

そして、9 点または 10 点を付けた人を「推奨者」、7 点または 8 点を付けた人を「中立者」、6 点以下を付けた人を「批判者」とし、推奨者の割合から批判者の割合を引いた値が NPS である。NPS の値が高いほど顧客ロイヤルティ（企業や製品、サービス、ブランドに対する愛着や信頼の度合い）が高いことを表す。

このプロジェクトの目標の 1 つに、学生が地域（ここでは倉敷市）への愛着の気持ちを高め、より積極的に地域連携活動に関わるようになることがあり、さらには地域への定住促進の効果も期待されていた。

学生の地域への愛着の度合いは学生の倉敷市に対する NPS と相関関係があり、プロジェクトの前後で NPS の値に変化があれば、それはプロジェクトの効果といえるのではないかという仮説のもと、プロジェクト開始時として第 1 週とプロジェクト終了時として阿智神社秋季例大祭への参加後の 2 回計測した。究極の質問は、「あなたは、倉敷はいい所、と他の人に推奨したいですか？」である。質問は、NPS とは直接関係のないいくつかの質問の中に混ぜて質問紙の形式で行った。結果は表 2 のようであった。

両年度ともにプロジェクトの前後で NPS の値に大きな変化があり、プロジェクト開始時にはマイナスであったものが、プロジェクト終了後には大きくプラスに転じている。これは、プロジェクトが学生に対して倉敷への愛着＝“倉敷愛”の醸成に対して有効であったことを示しているといえよう。但し、この変化の要因が、プロジェクトへの参加のみであったとは限らないことや、プロジェクト終了時の回答は祭り参加直後の高揚した状態でのものであるためより上方に振れている可能性もあり精度の高い調査ではないが、学生たちの地域（倉敷市）に対する印象を高

めることに繋がったことは確かであろう。

質問：「あなたは、倉敷はいい所、と他の人に推奨したいですか？」
NPS 値（推奨者の割合－批判者の割合）

	プロジェクト開始時	プロジェクト終了時	NPS の差
2016 年度（n=11）	-9.1	27.3	36.4
2017 年度（n= 9）	-22.2	22.2	44.4

表２：プロジェクト前後の NPS の変化

３．まとめ

学生による地域連携活動として「倉敷素隠居プロジェクト」を取り上げ、その概要と成果を示した。地域連携活動の効果としては該当地域の活性化が主たる目的ではあるが、地域連携活動を通して学生が感じる地域愛の向上に効果があったことが分かった。本プロジェクト参加学生に限らず、多くの学生は大学が所在する地域外の出身であることが多く、4 年間を大学のある地域で過ごし、卒業後はまた他の地域に出ていくことが多い。このような学生にとって、学生時代を過ごした地域への良い印象や愛着の気持ちは、将来その地域に対して何らかの貢献をすることになるか否かに大きく影響すると考えられる。大学所在地域に対して学生が抱く“地域愛”の醸成は、学生による地域連携活動の大きな意義の１つになり得るであろう。

謝辞

倉敷素隠居プロジェクトにご協力・ご指導いただいた、倉敷素隠居保存会様、倉敷未来プロジェクト様に深く感謝いたします。

註

1）平成 26 年度「地（知）の拠点整備事業」：　http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/1358201.htm
2）「文化産業都市倉敷の未来を拓く若衆育成と大学連携モデル創出事業」：
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/06/01/1358108_12_2_1.pdf
3）「地域課題解決に取り組むことのできる地域人材を育成する教育プログラム開発事業」：　http://www.kusa.ac.jp/coc/
4）「倉敷未来プロジェクト」：　http://www.city.kurashiki.okayama.jp/mirai-p/

参考文献

1）倉敷素隠居保存会：すいんきょ，倉敷素隠居保存会，2017 年
2）フレッド・ライクヘルド，ロブ・マーキー　森光威文，大越一樹 監訳：ネット・プロモーター経営－顧客ロイヤルティ指標 NPS で「利益ある成長」を実現する，プレジデント社，2013 年

The effectiveness of the student project in cooperation with the local community

― Case Development of "Kurashiki SUINKYO Project" ―

Koji YANAGIDA, Hideyuki IGARASHI, Masataka INOUE, Chris WALTON,
Chiaki KONDO, Tomoki MORIYAMA

Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2018)

As promoted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (NEXT), Kurashiki University of Science and the Arts has undertaken a five year program of COC (Center of Community) educational activity starting in 2014. One element of this program involves the Total Design Practice 1 class in the Department of Design and Art, with the objective of "Educational program development for the training of local talent to handle community problem-solving."

This paper reports the outline, results and evaluation of the "Kurashiki SUINKYO Project," a collaboration between students in the Total Design Practice 1 class and local community leaders. In this project, the authors called on students to research the culture and history of Kurashiki City, where the university is located, and the SUINKYO, which is a mask event with over 300 years of tradition. The appearance of the SUINKYO is one of the highlights of the Achi Shrine Festival held each year in Kurashiki City. At the culmination of this project, students designed, created and proposed several pairs of original SUINKYO masks, and then participated in the festival wearing them. Evaluation results by NPS (Net Promoter Score) showed that this project enhanced student brand loyalty for Kurashiki City.